みえの文化力指針

平成１８年５月

“みえけん愛”を育む社会の実現に向けて

県民しあわせプランでは、「みえけん愛を育む“しあわせ創造県”」を「県民が主役となって築く」ことを基本理念としています。

この指針は、「みえけん愛」を育む社会の実現を目指して、文化の持つ力に着目し、その力を高め、生かすための考え方と展開の道筋を示したもので、県の政策を考えるときの拠り所となるものです。

県政の運営は、県民の皆さんが主役で、多様な主体が協働して実施することが基本であり、この指針の考え方も市・町や県民の皆さんと共有できるようにしていくことが大切です。

１　「文化力」に着目して、政策を見直します

（１）「文化力」を政策のベースに

①　時代の変化

戦後、我が国は、経済成長を最優先の目標として取り組み、便利で豊かな生活を手に入れることができました。

しかし、あまりにも効率性やスピードを求めすぎた結果、助け合いや思いやりといった人々の絆が薄れるとともに、地域の特色や独自性が失われるなど、人々の心や家庭、地域の問題といった形で、社会のひずみが顕在化してきています。

また、本格的な人口減少社会が到来し、経済が右肩上がりに発展する時代が終息するなど、時代は、成長から成熟への大きな転換期にあり、人々の価値観が多様化するとともに、一人ひとりの生き方や暮らしに対するこだわりが強まってきています。

しかし、行政は、このような社会のひずみや、成熟社会への変化にうまく対応できていない面があり、政策のあり方が問われています。

②　「文化」と「文化力」

文化は、長い時間をかけて育まれてきた知恵と工夫の結晶であり、暮らしの営みの履歴ともいえるものです。健康や平和と同じように普段はその大切さになかなか気づかないものですが、豊かな心や感性を育む、地域社会の絆や基盤を形成する、さらには産業活動の創造性も高めるなど、さまざまな場面で私たちの生活の豊かさを支えてきました。これからの成熟社会を展望したとき、このような文化の持つ意義、役割には大変大きなものがあります。

そこで、県は、「文化」を、「生活の質を高めるための人々のさまざまな活動及びその成果」と広く定義したうえで、「文化の持つ、人や地域を元気にし、暮らしをより良くしていく力及び人や地域が持っている人々を引きつけ魅了する力」を「文化力」ととらえ、政策に生かしていくこととしました。

③　経済と文化のバランスのとれた政策への転換

行政は、これまで、暮らしの中の経済的な豊かさや利便性を高めることに重点をおいてきましたが、これからは、時代の変化に対応し、生活の質や一人ひとりの生き方、暮らしの中のしあわせ感をもっと大切にする方向に政策の重点を移すことが求められています。そこで、県は、社会のひずみを解消し、一人ひとりが元気で、地域が輝く社会の実現を目指して、文化力を政策のベースに位置づけ、経済的合理性や効率性など経済的価値に基づく判断だけでなく、文化的な価値に着目し、経済と文化のバランスのとれた政策へと転換していきます。

（２）文化力の三つの側面に着目

文化には、日々の暮らしを豊かにすることから世界平和への貢献まで多様な力がありますが、県は、心豊かに生きるための一人ひとりの力（人間力）、たくさんの人の力が集まって、地域の魅力や価値を高めるための力（地域力）、人間力や地域力の源泉になる、新しい知恵や仕組みを生み出す力（創造力）の三つの側面に着目して、文化力を政策に生かしていきます。

①　人間力

文化は、一人ひとりの持つさまざまな能力を引き出し、感性を育て、現代社会で、ともすれば失いがちな人間らしさや心の豊かさを回復させることができます。このような文化の意義に着目したとき、文化力の一側面を「人間力」としてとらえることができます。人間力は、文化が人に働きかけて人の有する潜在力を顕在化させる力と、顕在化した人間の力の双方の力であり、人間らしく心豊かに生きるための一人ひとりの力です。

②　地域力

文化は、地域に暮らす人々の共通の心の拠り所となるものであり、個人が尊重され、さまざまな人が共生する地域社会の絆や精神的基盤を形づくります。このような文化の意義に着目したとき、文化力の一側面を「地域力」としてとらえることができます。地域力は、文化が地域に働きかけて地域の有する潜在力を顕在化させる力と、顕在化した地域の力の双方の力であり、地域の魅力や価値を高めるとともに、地域社会の絆やアイデンティティを育む力です。

③　創造力

文化は、新しい文化を創造する基盤であり、人は多様な文化に触れて創造性を高めることができます。また、文化は、さまざまな産業において付加価値を生み出す源泉となり、新たな需要や商品・サービスを生み出すなど、創造性の高い産業活動の実現にも寄与します。このような文化の意義に着目したとき、文化力の一側面を「創造力」としてとらえることができます。創造力は、文化が人や地域の創造性に働きかけて生まれる力で、芸術文化から生活様式、産業活動にいたるまで、人間力や地域力の源泉になる、新しい知恵や仕組みを生み出し、変えていく力です。

2　文化力で元気な三重づくりを進めます

三重には、豊かな自然や多様な歴史が育んだ文化資源があります。

日本人の精神文化の源流をなす「伊勢」・「熊野」があり、交通の要衝の地でもある三重は、全国から人が集い、活発な交流が行われる中で、多様な文化を受け入れ、熟成し、新しい文化を育んできました。そして、来訪者に対する「もてなしの心」を育むとともに、俳聖松尾芭蕉、国学者本居宣長、能楽の観阿弥をはじめ、日本人の心を深く見つめてきた多くの文化人を輩出するなど、三重には心を大切にする伝統がいきづいています。

また、「美し国（うましくに）」と称された変化に富んだ自然環境や、歴史的な背景の中で、さまざまなまちが分散して発展してきた三重は、各地域でそれぞれ個性ある多様な文化を育むことによって、地域の魅力や価値を高めてきました。

さらに、豊かな物産や地理的条件を生かして活発な産業活動を展開してきた三重は、伊勢商人や御師の活動、伝統工芸の優れた職人の技、自然の力を引き出す農林水産業の工夫など、多彩な知恵と技を育んできました。

これまで、ともすれば見過ごしがちであった、三重の多様な文化資源を生かしながら、文化力を高め、生かして、「こころ」、「地域」、「産業」の「三つの元気」に取り組みます。

なお、人間力、地域力、創造力という文化力の三つの側面に着目しましたが、例えば、創造力が人間力を高め、人間力が結集して地域力を高め、そして、地域力が創造力を刺激するというように、この三つの力は、相互に補完、循環する関係にあり、総合的に文化力を高め、生かすことが大切です。

（１）文化力でこころを元気に

人は、さまざまな場面で充実感や生きる喜び、生きがいを感じるなど、心豊かに生きる中で、こころを元気にすることができます。

人間らしく心豊かに生きるためには、人それぞれが夢を描くことができ、その実現に向けて、一人ひとりが持つ潜在的な能力を引き出し、高めていくとともに、制約となる要因を取り除くことが基本になります。

夢を描くためには、多様な選択ができたり、何度もチャレンジできたりすることや、本物に触れて感性を高められたり、心のゆとりを回復できたりすることが重要です。

また、人それぞれが持つ潜在的な能力を引き出し、高めるためには、いつでも、誰でも学べることが大切です。

さらに、能力の発揮を阻害するさまざまな要因を取り除くためには、一人ひとりが個として尊重され、誰もが社会に参画できるようにすることが重要です。

このような考え方を踏まえて、県民の皆さんが活動する舞台づくりを行うことにより、一人ひとりが、生きる喜びや生きがいを感じられ、「こころが元気に」なるように取り組みます。

（２）文化力で地域を元気に

地域の魅力や価値を高めたり、地域社会の絆、アイデンティティが育まれたりする

中で、地域社会が活性化され、地域の元気につながります。

地域力を高めるためには、地域の「ひと」、「もの」、「こと」といったさまざまな文化資源を活用することや、地域内での経済・資源の循環を進めること、人と人とのつながりを広げることが基本になります。

地域の歴史、伝統、景観などの文化ストックは、「時の積み重ね」の中で育まれてきたものであり、そこにしかない地域の誇りとして活用し、地域の価値やアイデンティティを高めることが大切です。

また、人材や資金、技術、食材といった地域にある資源を循環させながら活用し、安全、安心の地域密着・生活密着型のサービスを提供することにより、地域経済の自立性、持続性を高めることが重要です。

さらに、地域の持つ潜在的な力や創造力を向上させ、地域社会の課題解決能力を高めるため、人と人との出会いやネットワークを広げることが大切です。

このような考え方を踏まえて、地域の皆さんが活動する舞台づくりを行い、自立、持続可能な地域づくりを進めることにより、「地域が元気に」なるよう取り組みます。

（３）文化力で産業を元気に

産業を元気にするためには、創造力を生かして、地域のさまざまな資源を活用し、付加価値を高めることが大切です。

創造力を高めるためには、先人の知恵、生活の知恵、先端科学の知恵、熟練の技など、さまざまな知恵のネットワークを形成することが基本になります。

工業社会から知識情報社会へと産業構造の変化が加速し、さまざまな知恵やアイデアを生かして付加価値の高い商品、サービスを提供することが競争力の源泉になってきています。地域の農林水産業から先端産業まで、業種や地域を越えて、人の交流、ネットワークを拡充し、新しい知恵や独自の知恵を生み出すことが重要です。

また、創造力を高め、人間の持つ多様な能力を引き出すため、さまざまな分野の知恵や情報が交流する知的拠点の充実が大切です。

このような考え方を踏まえて、活発な産業活動が行われる舞台づくりを進めることにより、新しい知恵や独自の知恵を生かした新たな商品、サービスが生み出され、「産業が元気に」なるよう取り組みます。

３　歴史と文化のいきづく「三重の未来」を目指します

三重の豊かな文化資源を活用して、文化力を高め、生かして、「こころ」、「地域」、「産業」の「三つの元気」に取り組むことにより、歴史と文化のいきづく「三重の未来」として、「こころのふるさと三重」、「暮らしを楽しむ三重」、「知恵が響きあう三重」を目指します。

①　こころのふるさと三重

こころのふるさととともいえる「伊勢」・「熊野」、山から川、海へと続く日本の原風景など、先人達から受け継がれてきた郷土の自然や歴史、文化などを誇りに思い、

愛し、さらに良くしていこうとする心が育まれています。

多様な自然・文化体験により豊かな感性が育まれ、こころを大切に考える風土が根づき、住む人にとっても訪れる人にとっても、幸せや忘れかけていた大切なものに改めて気づき、心の豊かさを実感することのできる、「こころのふるさと三重」を目指します。

② 暮らしを楽しむ三重

都市と田園地帯が隣り合い、豊かな自然に身近に触れ合うことができるとともに、関西・中部の高次都市機能も利用できるという恵まれた生活空間の中で、県民一人ひとりがゆとりある時間・空間を創造しています。

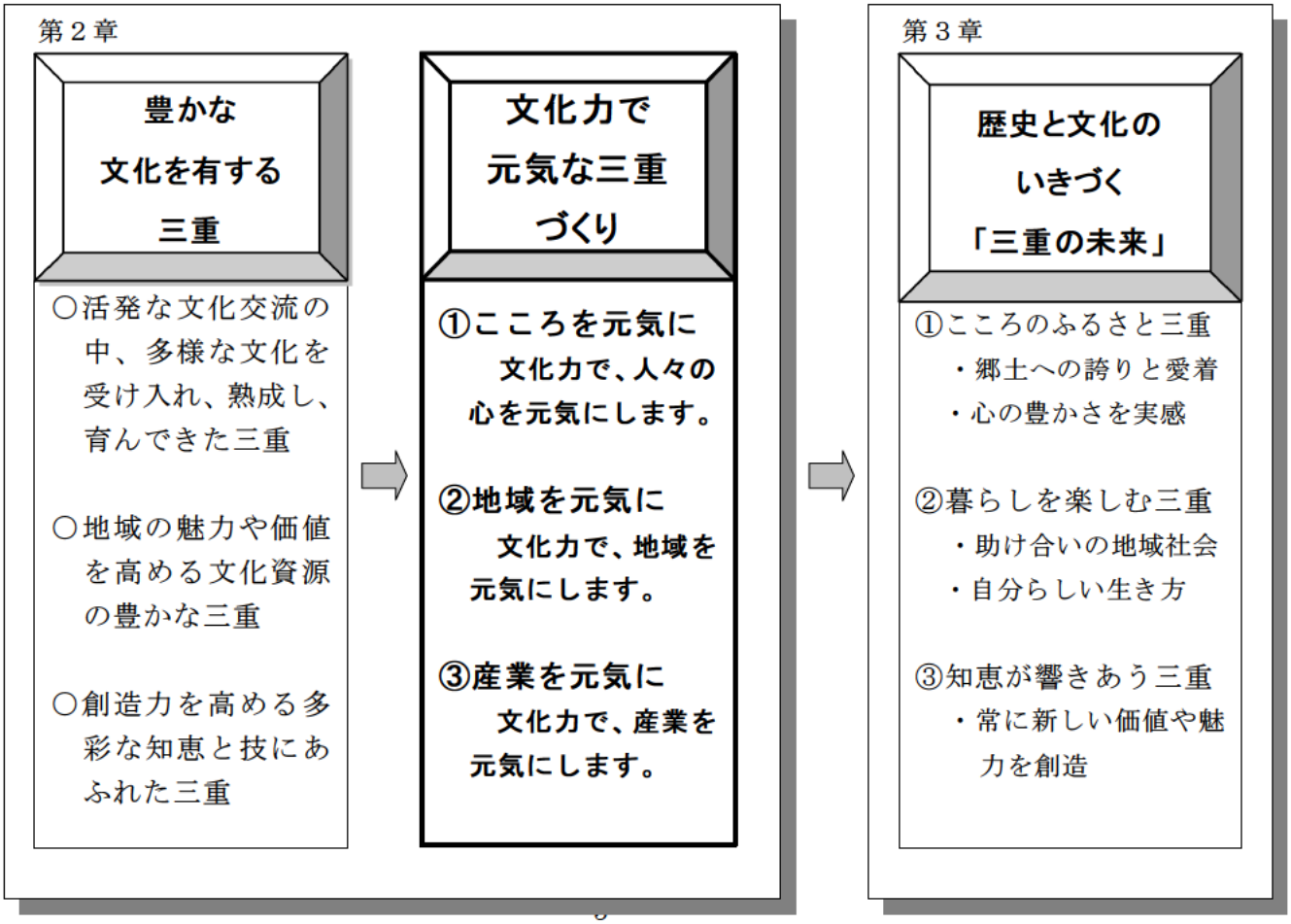
そして、人と人、地域と地域の絆が育まれ、連帯感や思いやりにあふれ、信頼と助け合いに基づく人間関係が心豊かな地域社会を支えています。

お互いさまの気持ちで支え合いながら、土地の食材を生かした料理や、健康づくり、環境に優しい暮らし方など、自分らしい生き方を楽しむことができる、誰もが多様な「暮らしを楽しむ三重」を目指します。

③ 知恵が響きあう三重

各地域や都市の特徴を生かして育まれた、地域それぞれの多彩な知恵や技、伝統工芸などが、地域の人に愛され、生かされ、次世代に引き継がれています。

さまざまな知恵が交流、連携し、古いものを大切にしながらさまざまなものを組み合わせて、常に新しい魅力や価値を生み出していく、「知恵が響きあう三重」を目指します。



４　文化力を高め、生かすための舞台づくりに取り組みます

（１）文化力を高め、生かすための発想転換

それでは、文化力で元気な三重づくりを進め、歴史と文化のいきづく「三重の未来」を目指すために、県は、具体的に、どのような視点から政策を考え、県民の皆さんが活動する舞台づくりを進めることが求められるのでしょうか。

文化は、風土や歴史と深く関わるもので、一朝一夕に形成されるものではなく、地域の中で長い時間をかけて積み上げられてきたものです。このような文化がさまざまな分野で私たちの生活の豊かさを支えてきました。例えば、環境について考えた場合、「もったいない文化」が日々の暮らしの中に浸透し、共通の価値や生活様式となることによって、地域の中で資源が循環する仕組みを支えてきました。

これからの豊かな地域社会を築いていくためには、伝統芸能を含む芸術文化はもとより、長期的な視点から、環境、福祉、森林、観光、人権、男女共同参画など、それぞれの分野で三重らしさを生かした文化を育み、文化力を高めていくことが基本になります。

そのため、それぞれの分野で、文化力を政策のベースに位置づけ、文化力を高め、生かすという視点を加えることにより、政策を立案、実行するうえでの発想の転換を進め、政策を見直していきます。

（２）発想転換を進めるための基本スタンス

①　発想転換の形

文化力を高め、生かすための発想の転換にあたっては、経済的な効率性だけにとらわれずに、文化の持つ多面的な力に着目することが基本になります。従って、効果、効率を考えるときには、これまでの経済的な合理性や効率性などの単一の基準ではなく、多面的な価値に着目した複眼的な思考が必要になります。

例えば、棚田は、経済面だけからみると効率性の低い農地ですが、見方を変えると歴史や風土を反映した貴重な地域資源ととらえることができます。また、古い民家は、暗くて不便なものととらえられがちですが、生活の積み重ねを感じさせ、伝統技術を継承する文化資源でもあります。このように、ものの見方や考え方を変えることによって、政策のあり方を変えていきます。

また、異なった価値観や文化を認め合うといった多様性を尊重するという発想も大切にしていきます。

②　発想転換の方法

発想を転換するためには、既存の基準、制度、前例などにとらわれずに柔軟に考えることが求められます。そうすると、政策を考える際の基準、拠り所が、状況に応じて変化し、相対的になってきますので、常に、「誰のために、何のために、何を目指しているのか」を問い続けるとともに、県民の皆さんと一緒に考えていくことを大切にしていきます。

また、文化は、県民一人ひとりの自発的な活動の中で創造され、多様な考え方や

価値観、地域の特性や独自性のもとで育まれます。従って、県の政策を考えるときは、画一的、集権的な政策でなく、地域の多様な特色や独自性を生かすこと、多様な主体の自主的な活動を支えることを基本にしていきます。

（３）三つのキーワードで政策の見直し

文化力を高め、生かすためには、多様な文化ストックを発掘、活用し、循環させて地域の魅力や価値を高めるとともに、さまざまに交流、連携する中で新たな文化や価値の創造につなげること、そして文化や価値の多様性と調和を確保することが大切であり、次の三つのキーワードの視点から政策を見直していきます。

①　ストックの活用・循環

地域の魅力や価値を高めたり、新たな知恵や技を創造したりするためには、これまで見過ごしがちであった、「ひと」、「もの」、「こと」といった地域の文化ストックを発掘、活用し、それが、新たな文化や価値の創造につながるように循環させることが重要です。そのため、「ストックの活用・循環」をキーワードとします。

②　交流・連携

また、新たな文化や価値を創造するためには、人と人、地域と地域、知恵や技などの、さまざまな交流・連携を深めることが大切であり、人と人との出会いの場やネットワークを広げ、信頼と協力の関係を築いていく必要があります。そのため、「交流・連携」をキーワードとします。

③　多様性と調和

さらに、新たな文化を創造したり、豊かな人間性を形成したりするためには、社会の中の多様な考え方や価値観の調和が図られ、多様な価値やお互いの違いを尊重する風土が形成されることが大切です。そのため、「多様性と調和」をキーワードとします。

このように、文化力を高め、生かすために、これまでの発想を転換しながら、三つのキーワードの視点で政策を見直し、県民の皆さんが活動する舞台づくりを進めていきます。

（４）文化力で進める地域主権の社会

これまでの政策が、さまざまな課題に対する対症療法的なものとするなら、文化力をベースに置いた政策は、中長期的に社会全体の体質を改善し、健康な社会づくりを目指すものといえます。また、文化力は、県民一人ひとりが主体的に地域と関わり、人と人との信頼や絆を深めることを基本に、「新しい時代の公」（ニュー・パブリック・ガバナンス）に基づく地域主権の社会を構築していくための政策の基本となるものです。

今後、県民や市・町の皆さんと考え方の共有を図りながら、文化力を高め、生かす取組を進めていきます。